ヒバのミニチュア採種園に向けて

造林用樹木の採種園のひとつにミニチュア採種園というものがあります。通常の採種園では採種木の樹高が高いので、結実した球果が人間の手の届く範囲にありません。そのため高所作業車などを用いて球果を採取する必要があり、作業が非効率でコストが高いうえに危険が伴います。ミニチュア採種園は、この不都合を改善するためにスギなどの樹種で実用化された技術です。

道南支場ではミニチュア採種園の技術をヒバ（ヒノキアスナロ）に適用する試験を行いました。球果を容易にかつ安全に採取できるように採種木の樹幹を1.2mの高さで切り落とし（写真－１）、7月に樹幹の根元にジベレリン顆粒（着花を促進する植物ホルモン）を一個体につき5mgずつ埋め込みました。その結果、試験した12本の採種木すべてが翌春に着花し（写真－２）、11月には球果を採取することができました。

現在、道南地方ではヒバの造林面積が増加傾向にありますが、種子の安定供給など種苗生産システムが未整備のため、地場産苗木が不足しています。将来、優れた採種木（クローン）を確保できれば、このミニチュア採種園技術によって苗木生産量の増加と遺伝的改良が一気に進むことが期待されます。

（道南支場）

写真－１　断幹した採種木

写真－２　着花した雌花と雄花

写真－３　採種園